

続・汝の名はかくして変わる

—— 「表意」の神話, 「表音」の虚構

朱 一 星

〈提要〉

笔者认为:如果说韩国,北朝鲜人名读音“原文”化的主要原因是韩文和朝鲜文实质上废除了汉字,属于情有可原,那么,中国人名在日文中的“原文”读音普遍化标准化令人首肯的积极意义就所剩无几了。

本文从两方面来说明。其一,技术上难度大,毫无具有现实意义的“标准”可言。其二,从文字学理论上说,汉字是标示语言化心象(语义)的语素文字,即“标意文字”。汉字本质上不具有绝对的音值,是与同一语素对于不同语言区的人来说有不同读音这一语言事实对应的,这叫汉字的“言语默认读音”。人名汉字读“原文”音的前提,是将汉字的“言语默认读音”跨域交叉化、普遍化、和绝对化。这意味着对汉字本质属性的否定,人为造成干扰汉字圈各语言语音独立性的“杂音”。

随着时代的变化,中文和日文如何应对跨域人名的流通,如何形成既合理又具有可操作性的书写规范,确为一个现实的课题。对此,笔者认为,人名、地名、企业名等均采用不干预汉字读音的,汉字=拉丁文名并列标记的做法,更符合当今的时代方向。此书写规范不仅适用于当代人名,也囊括古代人名;不仅适用于汉语普通话,也涵盖方言区人名读音、日本人名、以及来自其他外语的翻译人名。这样做,在日本也契合眼下大部分广播媒体在播音时对中国人名字仍使用日语读音的现实。

〈关键词〉

人名汉字 [人名漢字] 言语默认读音 [言語デフォルト読み] 原文读音 [現地読み]
标意文字 [標意文字] 拉丁文名字 [アルファベット名]

一. 新たな問題提起

筆者は前稿(朱一星2012)で、韓国・北朝鮮での中国人名・日本人名の「現地読み」と、日本における韓国・北朝鮮人名の「現地読み」について考察し、韓国や北朝鮮の「現地読み」はハングルにおいて実質漢字を制限・廃止したことに起因すると主張した。また、漢字の放棄によって、漢字の「言語デフォルト読み」そのものの存在意義が消失し、人名を、漢字抜き、単なる音声として捉えるようになったと説明し、この現象は、かつてのベトナムに続き、韓国・北朝鮮における漢字表記システムの歴史的に後退を意味すると分析した。

本稿は、その「続編」として、日本における中国人名の「現地読み」について考察する。自明

のことだが、同じ「現地読み」でも、今回は漢字存続言語のなかでの「現地読み」についてであり、前稿の状況とは事情がまるきり違う。この段階で簡潔に言うと、この「現地読み」が漢字発音の「外来語化」であることは、誰の目（耳?）にも明らかな事実であり、漢字の性質にそぐわない習慣であると考える。

「現地読み」を採用するには、中国人名の漢字の「現地」とは何か、その発音が正確に表現できるものかという技術的なハードルを超えなければならない。然もないと様々な混乱を引き起こす。

本稿では、この問題を、発音認定の技術的な側面と、漢字理論の側面から考察していきたい。

二. 現地読みの朝日方式と読売方式

前稿の校正がほぼ終わった時、読売新聞が、紙上で中国著名人の名の発音表記を現地読みで行うと発表した(図1)。これは、大手新聞社のなかで、朝日新聞に続き、正式に中国の人名漢字を「現地読み」に切り替えた二社目である。

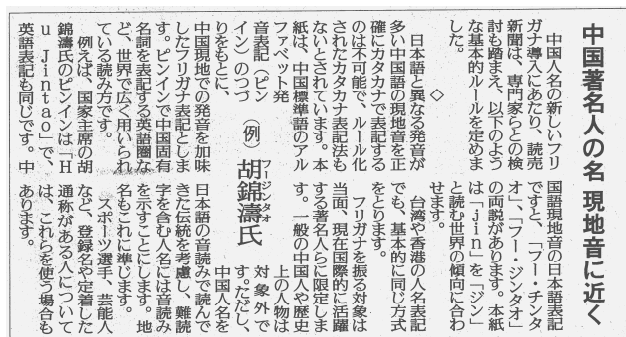


図1 読売新聞の説明(2011年12月26日, 4面)

現地読みに踏み切った理由その

ものは、想像の範囲を超えるものではなかった。一方、筆者の眼を引いたのは、説明に挙げられた「胡锦涛」についての、「現地読み」の表記である。読売新聞は(現代中国語漢字発音の「『jin』を『ジン』と読む世界の傾向に合わせ」る方針)である。実は読売新聞とは違う「フー・チンタオ」という表記は、朝日新聞のすでに採用した「現地読み」である。ということは、現地読みに切り替えた主要紙二社が、違う表記ルールを採用したことになるのである。

また、視覚的に文字情報を伝える新聞の紙面では、「現地読み」の表記を採用しているのに対して、音声によって情報を伝える二社の系列テレビでは、今まで通り日本語読みを維持している。ここで、「現地読み」は音声として伝えるための手段ではなく、視覚的な文字情報として採用されたのだという共通点に留意されたい。

ほぼ同じ時期に、『東方』雑誌に中国語人名漢字の日本語音転写の統一的なルール作りを探る一連の議論があった(『東方』364号~368号)。読売新聞東京本社の藤野彰もこの連載に寄稿したところを考えると、一連の議論が今回の読売新聞の方針転換とは何らかの関係を有することは容易に想像できる。この連載のなかでは、池田巧の考案(池田A方式;池田B方式)に並び、東京工業大学研究チームのJピンイン(陳方式)も紹介されている。細かい異同についての説明は省くが、中国語の発音に詳しくない人には難しいので、その違いを分かりやすく表現すべく、具体的な人名を例に、次のような表形式に置き換えてみた。

人名例	胡錦濤	張戎	章子怡
池田A方式	ホウ・ジンタオ	チャアン・ロオン	チャアン・ヅーイー*
池田B方式	フー・ジンタオ(読売)	ジャン・ロン	ジャン・ヅーイー*
陳方式	ホウー・ジンタオ	ジャン・ウローン	ジェヤーン・ズイ
慣用方式	フー・チンタオ(朝日)	ユン・チアン	チャン・ツイー

表1：中国人名漢字の「現地読み」は音の捉え方によって違う表記になる

* は池田2011の解説と同解説の基準になる「中国語音節表記ガイドライン」との間に僅差がある。

なお、ほかにいわゆる「文部省方式」もあるが、後述の理由で、考察の対照から除外した。

上記の表で分かるように、わずか数例の中国人名の漢字だけでも、その多様な表記方法、そして根拠となる聞こえ方、またその読みによって産出される多様な「現地音」は、とても統一感のあるものとは言いがたい。しかし、明確で分かりやすい基準がなければ、どれも単なる「慣用方式」の一つに過ぎないことになる。

なお、日本では、社会科教科書には中国地名が、以前から「現地読み」のような仮名表記で記載されてきたが、その基準はかなり恣意的であるため、上記の「現地読み」方式と並列するのを躊躇した。『東方』367号に明木茂夫の論文はそのことに触れて、妥当な分析を行い、次のように述べている¹⁾。

当時の国語審議会会長安藤正次が「むずかしい漢字をへらすのが、漢字制限である」と発言していることから明らかなように、これは当時の漢字廃止論・漢字制限論と連動したものであったのであろう。

(中略)

他にも、歴史のテストで「リャオトン半島」と書いたら×だった、「リャオトン半島」が正解だった、と話してくれた学生がいる。そりゃ無茶だよ……。しかも、近年の地図帳は「リアオトン」に改訂されているのでまた話がややこしい。

明木茂夫の言う「文部省式」中国地名仮名表記は、不安定なだけでなく、漢字廃止の延長線上に位置するものであり、そこに、むしろ前近代的な「漢字廃止論」が見え隠れ、もはや漢字音そのものの問題ではないので、本稿の考察対象にはならない。

中国語は、異なる音節数が多いために、音節数の少ないカタカナ表記に押し込むことは、そもそも無理な話である。言語的土壌の違う日本語で、すでに完成したとも言える日本漢字音がうまく機

能しているのに、更にまったく異質な、新しい漢字音を被せることは、言語政策的に考えても賢明な方策とは言えないであろう。

辛うじて何らかの「基準」が成立したとしても、「現地読み」表記は「便宜上の発音」を越えて、中国人名漢字の日本語音の綴り方式として定着させようとするなら、当然、「現地読みカタカナ表記の正書法」も必要になる。現地「発音」とは名ばかりの、独特の日本語カタカナ「表記」を新たに立ち上げることになる。この現実に対して、中日両方の文字言語を熟知する者であればあるほど、果たしてこれら「基準」の存在理由はあるのかと懐疑的にならざるを得ない。音声文字でさえあれば、異言語の発音を忠実に転写できるとは、まったくの虚構だからである。

前述のように、中国人名を原則「現地読み」に切り替えた朝日方式と読売方式の両方とも、中国人名を基本的に標準中国語の北京語「現地読み」によるものだと発表している。そこにも根本的な認識不足が潜んでいる。例えば、香港や、東南アジア、また海外に住む中国人は、名前の実際の「読み方」も、パスポート名も、標準中国語と違う可能性が大きい。日本に住む華僑の漢字名は今も、これからも恐らく絶対多数が日本語読みであるだろう。更に、中国国内の朝鮮族の人名となると、本当の「現地読み」なら「ハングル読み」になるはずなので、中国人名の「現地読み」が、当該人間の民族や、方言音に左右されることは必至である。それらの問題点をもひっくるめて、標準語読みに一本化するのには、議論の惹起は必至である。漢字人名の読みを云々するまえに、漢字とは何かという本質的な問いを疎かにした、文字不在の発想としか言いようがない。

三、漢字とアルファベット文字との弁別的示差

ここで、人名問題から一旦離れて、漢字とアルファベット文字との本質的な違いについて、いくつか重要なポイントを述べたい。漢字人名の読みについても、究極的には、これから述べる漢字の本質に関わる課題から目をそらすことはできない。

漢字圏諸国は千数百年も漢字を共有してきたなかで、互いの言語の独自性を維持しながら、文字を共有しつつ、世界でもまれに見る素晴らしい知恵と言語習慣とを形成してきた。その知恵と習慣が成り立つ基盤は、外でもなく、漢字という文字の本質によるところが大きいのは、誰一人否定できない事実である。阿辻哲次が指摘したように、「表意文字はそれぞれの文字ごとに特定の意味を持つから、背景にある音声言語と切り離しても、文字の外面的な形だけで本来の意味を伝えることが可能である。」²⁾

今日われわれは、いま一度、原点に立ちかえり、漢字の性質のどこにその可能性が潜んでいるのかを確認する必要がある。

(1) 漢字は絶対音価を持たない「標意文字」である³⁾。

従来、漢字は「表意文字」だと説明してきた。表語文字や形態素文字などの議論もあったが、何れも「何」を表わすかの議論で、漢字が何かを表現しているという固定観念から離れることはできなかった。そうすると、自ずと漢字の字形に如何に意味を託すのか、その秘密を解き明かそうと